

# 私のボランティア体験記

## タイ・HIV感染孤児の家で暮らして

### 初めてのボランティアで海外へ

二〇〇六年四月、タイ・チェンマイ空港。一カ月ほど前までは、自分がまさかタイに来るとは思ってもみなかったのに、「縁」とでも言うような何かに導かれてチェンマイにやってきた私の姿が、そこにありました。チェンマイ市郊外にあるHIV感染孤児の家「バーンロムサイ」。そこで一年間、二一人の子ども達と一緒に生活しながら事務ボランティアとして働くために、タイにやって来たのです。

この初日の緊張した気持ちは、あれから二年近く経った今でもはつきりと思い出すことができます。なにしろ当時の私とよきたら、海外に長期滞在したことな

ければ、ボランティア活動をしたこともなし、子どもと一緒に暮らしたこともなければ、タイ語も全くわからない。初めてのタイでの生活、子ども達との出会いに期待はいっぱいでしたが、同時に「ないないづくし」の自分がちゃんとやっていけるのだろうか？ と不安も抱えながらのスタートでした。

### 「大きな家族」バーンロムサイ

「BAN ROM SAI (バーンロムサイ)」は、エイズで親を失い、自らもHIVに母子感染した子供たち四歳から一六歳まで二一人が暮らしている生活施設です。一九九九年にジョルジオアルマーニジャパン社の資金協力を得て、チェンマイ市郊外のナンプレー村に開設されまし



大橋 春子

【おおし はるか】1979年神奈川県生まれ。国際基督教大学卒業後、食品メーカー海外勤務を経て2006年4月から約1年間、タイ、チェンマイ郊外にあるHIV感染孤児の家「BAN ROM SAI」にて事務ボランティアとして活動。

た。それ以来、「単なる孤児院ではなく、スタッフも子ども達も、一つの『大きな家族』のように暮らす家でありたい」と考える代表の名取美和さんのもと、タイ人と日本人のスタッフ達が協力して子ども達を見守ってきました。開設からの三年間は、命を守るための闘いの日々で、一〇名の子ども達がエイズを発症して亡くなってしまうました。しかし抗HIV療法を受けるようになってからは誰一人病気を発症することなく、現在は全員が元気に暮らしています。私が滞在した二〇〇六〜七年頃は、主にタイ人スタッフが子ども達の教育や毎日の世話、肉親探し、地元に向けたHIV/エイズ啓発活動などを担当。日本人スタッフは日本の事務局と連絡を取りながら、ホー



みんな仲良し。一番年下のアーパイ（左）と14歳のテンモー（中央）、ミウ（右）

バーンロムサイでは、子ども達が色々な経験ができるよう様々な取組みがなされています。絵を描く時間もそのひとつ



洗車のお手伝い中。抗HIV療法のおかげでみんな元気です



ムの運営資金を確保していく活動に飛び回りつつ、ホームの運営に当たってました。

### ボランティアに行つたきっかけ

「このボランティアを始めたきっかけは？」とよく聞かれるのですが、私の場合そもそも発端は、大学卒業後に四

年間勤めた会社を辞め、次の就職先を探していた時、たまたまバーンロムサイのホームページの「ボランティアスタッフ募集」の文字が目とまったこと。以前からホームの活動について多少は知っていたのですが、ホームページの写真や活動内容についての文章を読むにつれて「ここは普通の孤児院じゃない。大人も子どもも人間らしく、自然体で過ごせる：そんなところではないか？」と強く魅かれるものを感じたのです。

その魅かれる気持ちのまま面接を受けに行き、ホームの代表、名取さんの笑顔を見て、ホームでの生活について話を伺ううちに「バーンロムサイで仕事をしたら、自分がどういう生き方をしていきたいかもよく考えられるし、とても楽しい気がする」と（勝手な？）確信が生まれてきました。いつもは石橋を叩いて渡るタイプなのですが、この時は行ってみよう！と直感が働いたというか、幸い採用して頂くことになり、面接から一カ月後にチェンマイに向かうことになりました。

それからの一カ月は、航空券の手配や海外旅行傷害保険の加入、チェンマイの治安についてやHIV/エイズという病気について、改めてインターネットや本で学びなおし：などしているうちあつという間に時間が過ぎ、気付いた時にはタイの土を踏んでいたのです。

### バーンロムサイでの仕事

冒頭にお話したように、「ないないづくし」の自分がちゃんとやっていけるのか？と漠とした不安を抱えながらやって来た私ですが、実際に来てみると、バーンロムサイは生活するにも仕事をするにも、本当に心地よい場所でした。最初はあまりに元気な子ども達の勢いにとまどったりしたこともありましたが、毎日一緒にご飯を食べて遊ぶうちに、すっかり子ども達と一緒に生活が当たり前になり、仕事と生活が一緒に暮らしにもすぐ慣れることができました。任期中に辛かった出来事といえは、雨季に発生する蚊に足をボコボコに刺されたことぐらいでしょうか。大人達は子ども達が元気で暮らせるように働く、というスタイルが私にはわかりやすく、すぐなじめたように思います。

ホームでの私の仕事は、支援者の方々にお礼状を送りし、またホームページやEメールなどでバーンロムサイの活動をお知らせすること、ホームページ管理、頂いた寄付の管理など、事務作業が中心でした。週に一〜二回、夜に子ども達に英語を教える時以外は、大体仕事は九時から一七時まで。日本の支援者の方々に対する窓口のようなポジションの仕事が多かったため、様々な方が色々な形でバーンロムサイのことを応援して



「マニキュアしたの。きれいでしょ？」13歳のゴイ

下さっていることを肌で感じる事ができました。毎月定額を何年も寄付して下さっている方。学校の授業でHIV/エイズについて学んだことをきっかけに、衣類などの物資を集めて

送ってくれた生徒さん達。日本で放映されたバンロムサイのドキュメンタリー番組を見て寄付を始めて下さった方…。色々な支援のきっかけがあり、頂いた寄付に百人百様の思いがこもっていることを知ることができました。さらに、子ども達の写真を撮り続けている写真家、バンロムサイのホームページをボランティアで作っている方など、自分の専門分野を生かして支援をしている方にたくさん出会えたことも、貴重な経験になりました。

タイ語が全く話せなかったことも、最初は少し不安があったのですが、実際の業務は日本語で行う内容が多かったため、思ったほど仕事で差し支えることはありませんでした。ただ、困ったのは子ども達と接する時。スタッフは親代わりですから、子どもとただ遊んでいれば良いわけではなく、悪いことをした子がいれば叱らなくてははいけません。しかし最初は、子どもに「いけないよ！」と言う

ことができても、叱る理由をちゃんと説明することができず、言葉が出てこないことをとてももどかしく感じました。でも、そんな私のタイ語の先生になつてくれたのも子ども達。ホームに授業料を出して頂いてタイ語の学校にも通いました。私のタイ語は、一緒に暮らす子ども達とタイ人スタッフから教えてもらったといつても過言ではありません。

オフィスでは年の近いタイ人スタッフが一緒に働いていて、彼女とタイ語、日本語を教えあいながら、子ども達のことや趣味の話、将来の夢などおしゃべりしたことは本当に楽しい思い出です。タイ人スタッフは皆とにかく根気よくタイ語やタイの文化について教えてくれ、こちらは日本語や日本文化について説明し…。と、日タイ文化談義に花が咲くこともしばしばでした。

チェンマイは親切な人が多く、市場の売り子のおばさんでも乗り合いバスのおじさんでも、こちらの拙いタイ語に合わせてゆっくり話してくれたので、私も臆せず下手なタイ語をどんどん使い、次第にタイ語での会話を楽しめるようになっていきました。

## 豊かで落ち着いた チェンマイの暮らし

チェンマイはタイではバンコクに次ぐ大都市であり、現在も急速に発展し続

けています。ただ、市街地を少し離れればまだまだ長閑な田園の風景が広がり、ゆったりとした時間が流れているのが良いところ。物価もバンコクに比べて安く、治安も比較的良いし、人ものんびりしているし…。とても住みやすいところだと思います。さらに、タイ北部には、山岳民族の手工芸品や伝統的な織物など、素朴で美しいものが色々あるので、休みの日は市場で小物や布を眺めるのが楽しかったです。他にご当地名物として、チェンマイ式のタイマッサージがあります。手頃な値段で受けることができるので、私も休みの日にはよく行って、ゆっくり凝りをほぐしてもらっていました。

さらに、チェンマイに行つて嬉しかったのは、食べ物が美味しいこと。バンロムサイには「ボランティアに來た男性は痩せる人が多いけれど、女性は必ず太る！」というジンクスがあります。私も例にたがわず、辛くて美味しいタイ料理に舌鼓を打っているうちに、すっかり体重が増えました(笑)。バンロムサイのタイ人スタッフには料理上手が多いので、材料や作り方の話を聞いているのが又楽しく、しょっちゅうお弁当をつまみ食いさせてもらったりおやつを分けてもらったり、家庭のタイ料理を満喫していました。

そんな暮らしやすいチェンマイで一年間生活しているうち、強く感じるように



ボランティア中の取材記事



(財) 地方公務員等ライフプラン協会発行 暮らしを豊かにするハンドブック「海外ボランティア編」

なったことが二つあります。一つは、「身近な人達とのつながりの大切さ」ということです。周りのタイ人達の暮らしぶりを見ていて、夕方に仕事を終えて家族揃って夕食をとる様子や、ご近所づきあいが密なところ、赤ちゃんや小さい子どもを、親だけでなく周囲の皆が面倒を見て育てるところ、日本人の暮らしは、こういう当たり前の人のつながりが随分薄れているなあ…でもこういうところに、喜びや満足感、安心感があるのではないかな、と思うようになりました。

もう一つは、「物や便利さは、ほどほどがよい」ということ。タイで生活中は、日本ほど色々な物が手に入りませんでした。でもかえって自分で縫い物をしたり、現地の材料で工夫して日本食を作ったり、それがとても楽しかったのです。周りに物や情報が溢れていると、自分で創造力を働かせる余地がありませんが、物がなければ自分で工夫する楽しみがあるし、気持ちも自然と（物でなく）周りの人に向いていく。物や情報、便利さはちょっと足りないくらいが、人間らしく暮らせるためには丁度いいのでは…と考えるようになりました。

### 子ども達が 元気に成長していくために

子どもが三一人もいれば色々なことが起こりますが、次々出てくる様々な問題

にマニュアルや明確な答えがあるわけではなく、スタッフは皆、手探りで考え、話し合っって最善の方法を探しています。バーンロムサイは、子ども達がHIV感染者であり、さらに「タイ国内で日本人が運営する団体」であり、さらに「大きな家族」を方針にしている点など、普通の孤児院とはちょっと違う個性を持っています。そのため、スタッフは健康な子どもを育てる場合に考える必要の無いような、独自の問題にも対処しなければなりません。

例えば子ども達がHIV感染孤児ということが出てくる、薬の問題。バーンロムサイの子ども達のほとんどが、抗HIV薬を毎日二回、朝晩飲みなくてはなりません。月三回薬を飲み忘れると薬に対する耐性が出来てしまい、場合によってはさらに高価な薬や国内での入手が困難な薬に変更する必要も出てきます。最悪の場合、効果のある薬が見つからないことも考えられる為、「毎日必ず定時に薬を飲む習慣をつける」ことは大きな課題。ホームにいる間は、保父母が薬を飲んだかを確認してくれますが、ホームを巣立った時に困らないように、子ども達にHIV/AIDSに関するレクチャーを行って薬を飲む理由をきちんと認識してもらおうなど、今できることを検討し実行に移しています。

その他にも、バーンロムサイでは、子



子ども達とスタッフ達。緑あふれるバーンロムサイにて（筆者、後列右から2番目）

ども達が元気に大人になり、社会の一員として暮らしていけるように、未来を見据えた様々な活動を行っています。ダイ社会の偏見や差別を無くすために地元の人向けのHIV／エイズ啓発活動や交流の催しなどを企画したり、「お金は天から降ってくるわけではなく、親が働いて入ってくるもの」という意識を子ども達にもつてもらおう為にホームのオリジナル商品を販売したり、HIV／エイズやホームの子ども達の現状を広く理解して頂く為、日本での展覧会を行ったり…。「子どもを育てる」ということは、なかなか正解が見えてこないことだと思

ます。それでも、常に「これが最善の方法だろうか？」「今、できること」は何か？」と自問しながら三二名の子どもの命を預かって行動していくスタッフの方々と一緒に仕事をして、私も「何をすべきか？ 何ができるのか？」常に自分で考えて行動を起こす大切さを学ばせてもらった気がしています。

### むすび

「これからも、できることをつづけたい」

私は、そもそも最初から「どうしても困っている子ども達の力になりたい」「HIV／エイズの差別をなくしたい」という強い気持ちがあつてボランティアを始めたわけではありませんでした。奉仕の気持ちの人が人より強かつたわけでもありません。実は、最初はそんな自分が恥ずかしくて「子どもと一緒に、自然体で暮らしてみたい」という気持ちだけで来てしまったけれど、こんな動機でいいんだろうか？」と悩んだこともありました。

でもホームでの一年を経て、今はこう考えています。ボランティアも支援も、百人いれば百通りの動機があり、活動があります。私の場合は、「〜のために何かしてあげたい」と思つてボランティアを始めたのではなく、「ボランティアをしてみたら、相手のことを深く知ることができて、大切に思うようになった。その人達のために、段々とやりたいことが

出てきた」、そんな順番だったと思うのです。「子ども達皆が大きくなるまで力になりたい。子ども達が病気のことで辛い思いをしないような社会を作りたい」という本当の気持ちは、結局後から自然についてきました。そして、そんな思いをいつの間にか持てるようになったこと、大事な人達ができたことが、ボランティアをしたことで貰ったプレゼントだったと思います。もしも、「ボランティアに興味はあるけれど、奉仕、自己犠牲：そんな気持ちがないといけないの？」と思つている方がいたら、「なんだかこういう活動、自分に向いていそう。やつてみたい」という気持ちがあれば充分ですよ、是非始めてみてはいかがですか？とお伝えしたいと思います。

日本に帰つて半年が過ぎ、今はバーンロムサイの子ども達の様子を紹介したスタッフの写真日記 (<http://www.banromsai.jp/photodiary/imgboard.cgi>) を読むのが日課になっています。子ども達にも早く会いに行きたいですが、しばらくは日本の事務局のお手伝いや、少しでも多くの人達にバーンロムサイのこと、HIV／エイズのことを知ってもらうことなど、できることを見つけて子ども達のために活動していきたい。大人になった子ども達に出会える日まで、これからも私なりの「ボランティア」を、続けていきたいと思つています。